

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：64401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23144

研究課題名(和文)アオウミガメを例にした稀少動物に対する人為空間の構造的理解に向けての比較研究

研究課題名(英文)Comparative Study of Artificial Space for Nature and Animals (ex. Green Sea Turtles)

研究代表者

高木 仁 (TAKAGI, HITOSHI)

国立民族学博物館・人類文明誌研究部・外来研究員

研究者番号：70851921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本科研究費研究では、稀少動物のアオウミガメを例にして、特に近代の全球的な三次元での動物の管理統制の特殊性について、その理解を促すような基礎を提示することが出来た点が最も大きな成果だと考えている(高木 2020 同年他2編、特集地図を参照)。本研究の基底にあるアイデアは、熱帯のある小規模民族社会における稀少動物・アオウミガメの開発を写し鏡のように用いて(高木 2021「ミスキート」)、現代の地球上における稀少動物に対する人為環境の空間の特殊性を人類学的に理解しようというものであるが、本科研究費研究ではその基礎となる平面図及び三次元図の基礎について研究を進め、一定の成果を得ることが出来たと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科研究費研究は学術的にみると人類学・民族誌学と呼ばれる分野に属する研究の一つである。本研究は、特に現代社会に暮らして、SDGsに取り組んだり、温暖化やゲリラ豪雨、カメムシの急増や熱中症対策、最先端の生物兵器やウイルスといった課題に直面する私たち自身を、他民族文化集団や古代文明に関する学識を用いて、相互的に理解しようと努める研究群の一つである。申請者は特に熱帯のある小規模民族社会における稀少動物・アオウミガメの開発を写し鏡のように用いて、現代の地球上における稀少動物に対する人為環境の空間の特殊性を理解しようと試みていて、本科研究でも多くの成果を得ることが出来た。

研究成果の概要(英文)：The most significant result of this KAKEN research was that we were able to provide a basis for promoting the understanding of the peculiarities of animal management and control, especially in order to fit the modern three-dimensional artificial space for animal management, by taking the rare green sea turtle as an example (see Takagi 2020, and 2 other of the same year, and the featured map). The idea underlying this research is to mirror the development of rare animals and green sea turtles in a small tropical ethnic community (Takagi 2021, Miskito) in order to understand the spatial peculiarities of the human-made environment for rare animals on our planet today. In this research, the basic two-dimensional view and three-dimensional view were studied, and a certain result was obtained4444444444.

研究分野：人類学・民族誌学

キーワード：稀少動物 アオウミガメ 管理統制 人為空間 モスキート・インディアン 全地球測位システム
英国植民地 人類学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は諸人間集団や人類(又は単純に人間)の有する時空間的理性(地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc)の解明に向けた研究の一端であり、稀少動物に対する人為空間に例として、その一つとして有力視されている「地球時代論」について対論を投じていくものである。

本研究を開始するきっかけとなったのは、20世紀後半から積極的に唱えられていた「地球時代」という思想の存在である。本思想は極めて影響力の強いものであるが、その検証や批判が十分におこなわれているとは思えず、これまでの研究で対論形成の必要性について訴えてきた(高木 2019)。

「地球時代論」が発表された20世紀中後期には、それまで見るができなかったようなマクロスケール(又は地球規模)での情報ネットワークの形成がおこなわれていった。家庭にはパソコンやインターネットが普及し、家のソファに座りながら遠くの人々と話したり、ゲームで遊んだりすることを一般的にするための基礎づくりが行われていった時代でもあった。また、この時代は、マルサス主義的な資源の有限性への警鐘(『成長の限界』)に対する認識が高まっていた頃でもあった。資源の有限性が唱えられ、「地球」が許容できる人間の限界について意識が高まっていた時代でもあった。梅棹忠夫も造語をもちいて、こうした時代の変革を「地球時代」として表現するようになっていた(梅棹忠夫 1991『梅棹忠夫著作集(第13巻)地球時代に生きる』中央公論社)。

昨今の学術世界でも、「グローバル化(又はグローバル化論)」といった言葉はよく見聞きすることが出来る。梅棹の「地球時代」もそれと近いものがあると考えればわかりやすい言葉である。グローブ(Globe)にせよ、地球にせよ、その思想の背景にあるものにさほど違いはないように思える。

「グローバル化論」や「地球時代論」が、現代の人間社会を特徴づける一因であると考えられる人は少なくない。それは昨今の膨大な研究蓄積から見ても良くわかる。そうした一方で、地球上のすべての者が「地球」を同じように経験しているかと言う点については、人類学からは少なからず疑問が呈されてきている。また、「地球」という考え方を持たない民族も少なからず生存してきたという民族学の研究結果がある。このような学術的な状況を鑑みると、「地球時代」は、いまだ仮説の域をでていないと考えるのが妥当であろう。

「地球時代論」が発表された20世紀中後期からすでに半世紀ほどが経過している。その途中には、人間集団が影響を持つことの出来る人為空間に対する歴史生態学の研究や、Commonsと呼ばれる共有空間に関する研究などが進んできたことが知られる。また、昨今では、極めて狭小で限られたパーソナルスペースがよく話題に上るし、過疎化・高齢化・都市近郊への極端な集住化、仮想空間・サイバースペース・オープンワールドなど、人間の有する時空間的理性は形や表現方法、対象とする空間を変えて度々話題にのぼるようになってきた。最近では、感染症の地球規模での流行とともに、夜や闇といった感性や芸術性でもって巷の閉鎖的な状況を表現することが流行しているということもよく耳にするようになった。果たして現在、私たちの置かれている空間的な状況(又は人間と自然の置かれた地球)は、「地球時代論」や「グローバル化論」で説明することが出来るのであろうか。

2. 研究の目的

(研究の目的は)本科研費研究(「稀少動物(アオウミガメ)に対する人為空間の構造的理解」)は、人間の時空間的理性(地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc)の解明に向けた研究の一端であるとともに、その一つとして有力視されている梅棹の「地球時代論」について、対論を投じていたためにデザインされた研究である。梅棹の「地球時代論」とはまったく異なる視点から、私たちの置かれている空間的な状況(又は人間と自然の置かれた地球)を説明することが本研究の目標である。

3. 研究の方法

(研究の方法は)本科研費研究(「稀少動物(アオウミガメ)に対する人為空間の構造的理解」)の方法は、地球の赤道や南北回帰線、中緯度帯付近のいくつかの地点への海外渡航を中心にして、各地点における現地資料や現地フィールドワークによって研究資料を収集し、その一次資料の分析によって、梅棹の「地球時代論」への対論を投じるための論拠を得ることとしている。ただし、本科研費研究の途中から、地球規模で感染症が蔓延することによって海外渡航が難しい状況となったため、海外渡航調査は主に文献調査にて補足をおこない、また同時にオンラインによって研究や情報収集もおこなっている。本研究では、特に大航海時代から始まったとされる英国人(旧英領ジャマイカ・英領ケイマン諸島・旧英領トリニダード・トバゴ島など)による開発の歴史を新たな研究事例として用い、また、既出の旧英国保護領のモスキート海岸における人類学・民族学的な研究を比較対象として、近代的な人間の有する動物に対する空間的理性(又は梅棹の「地球時代論」)の特性と相対化させるようにして論証していく方法を用いている。

4. 研究成果

まず、本研究が諸人間集団(又は単純に人間)の有する時空間的理性(地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc)の解明に向けた研究の一端であり、その一つとして有力視されている「地球時代論」や「グローバル化論」について対論を投げかけていくものであることを再確認しておく(議題:「地球時代論」)。本議題は、本節を通して徹底しないと、本成果の意義を見失いかねないことになりかねないため、再度提示させていただくこととする。ふたつ目に、本成果報告では、そのなかで思想的に極めておおきな影響力をもってきた梅棹忠夫による地球時代論を命題(又は対論相手)として設定させていただくこととする。梅棹忠夫の「地球時代論」が、学術的にみてもいまだ高い影響力を持続していることは、昨今での注目度の高さからもうかがい知ることができる(2022年4月25日 大学共同利用機関法人等主催シンポジウム「文明の生態史観」と地球社会)。みつつ目に、その命題に対して、申請者は、本科研費研究(「稀少動物(アオウミガメ)に対する人為空間の構造的理解」)およびこれまでの申請者の研究をもちいて反駁していくこととする。ここでは以上のような過程によって、本科研費研究の成果の学術的意義を提示していくこととする。

1). 地球時代論が内在する歴史性について

人間が有する時空間的理性の一つと仮想されている「地球時代」について、地表面を誰よりも広く闊歩しながら悠久の文明史に思いを馳せていた梅棹が、それを着想していくのは至極、自然な流れであったように思える。梅棹自身、生態学を始め、地理学などさまざまな分野に通じていたため、地図学や測量学、地球物理学ほかにも空間哲学・幾何学などにもその源流を遡ることもおそらく考えたに違いない。そうした幾重にも重なる思考の形跡は、国立民族学博物館にも梅棹文庫として足跡が残されていた。梅棹は「地球時代」と称する書物を幾つか出版しているが、その論述の基本的な骨組みとしてあるのは、有史以前の人類史であり、文明形成期であり、大航海時代におけるグローバル化であり、文明開化後の近代工業化である。そうした歴史の大河が論述の基礎構造に存在する。

幾か所で発表されている梅棹の「地球時代論」は、あくまで文明の生態史観からつづいている歴史への興味関心とともにあるという指摘は、先日おこなわれていたシンポジウムでも指摘されていた興味ぶかい点である(2022年4月25日 大学共同利用機関法人等主催シンポジウム「文明の生態史観」と地球社会)。梅棹が自身の地球時代論のなかで表現する地球とは、歴史(有史以前の人類史・文明形成期・大航海時代におけるグローバル化・文明開化後の近代工業化)のなかで形づくられた「地球」なのである。

*

諸民族や諸人類集団のなかには、極めて興味深い形で「地球」を表現する人々は少なくはない。本科研費にて研究分析した民族誌資料の中には、大地に槍を刺して、そこから湧き出た水が海の起源とする民族もいれば、海亀の甲羅を大地と見立てて地表面の楕円を表現する人々も少なからずいた。他方、地球上で稀少となっている絶滅危惧種の動物やアオウミガメを3次元的に空からモニタリングして監視できる人々もいれば、そうした近代的な世界の片隅で、植民地から伝播した技術を拾うようにして開発した簡素な道具や技術で、サンゴ礁の広がる海に円を描くようにして把握しながら稀少動物の狩りをおこなう集団も少なからず存在している(高木 2020)。

そこでは私どもと同じように資源の有限性や、成長の限界が考えられている可能性がどれほどあるのだろうか?そのような人々から見ればきっと私どもの「地球」もまた極めて特殊なものに映るに違いないという仮説を立てることも不可能ではない。

*

近代的な測量へと続く歴史は「地球時代」を考える上で大変興味深い視点を提供してくれる。古代ギリシア時代には、すでに地球球体説が唱えられていたことはよく知られている。哲学者のアリストテレスが、月食の際に月に映る地球の影をもちいて、地球球体説を実証したことで知られる。この頃には、すでに地球の円周が数値として算出されているし、地球儀もこの時代の発明であったことが知られる。

近代に続く歴史の源流をどのようにたどるかによって、見方も変わってくるだろうが、近代科学の源流をギリシア時代に求める声は多い。ギリシア時代には、経度の測定が問題になっていたものの、地球の測定に関する数理的課題や、地図作成の基礎がこの頃にできあがり、惑星としての地球の理解へと、飛躍的な発展をみた時代であったと考えられている。そして、その後に興ったルネサンス時代や大航海時代における測量や航海技術の進展へと続いていく。梅棹の地球時代論も、現代に至るまでの史的連続性が特徴としてある。ギリシア時代やローマ時代に発達した「地球」の理解が、現在に至るまで強い影響力を持ち、近代や現代に生きる私どもの「地球」の理解に大きく寄与しているという点を受容する歴史観(又は世界史観)である。

*

測量のような近代的な世界で発達したこうした科学技術の特殊性や、ある一時代における地球の表現形の相対化を、人類学は可能にするような学問に思えるが、梅棹の一連の「地球時代論」の著作(『地球時代の人類学』や「地球時代の文明論」、「地球時代の日本人論」)には、そうした考え方は採用されていない。梅棹がその論拠として依拠するのは、歴史を基軸とした文明論である。梅棹の「地球時代論」にはそのような「歴史」による制約があるし、梅棹の「地球時代論」

はその制約こそが最も巧みにその特徴を映しだしてくれる。

2). 有限性と感性

諸人間集団（又は単純に人間）の有する時空間的理性（地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc）の理解するための有力な一手として提出された梅棹の地球時代論であるが、その構想に至った背景には、地球の有限性に対して警鐘が鳴らされていた一般的な時代背景と、そして地球の有限性（又は地球の狭さ）に対する自身での気づきがあったと考えられる。梅棹は『地球時代の文明論』の一説、「地球への倦怠」という内容の節において、以下のような記録を残している。

「わかいころから、いくども機会にめぐまれたので、わたしはかなりあちこち出あるいた。もっとも、あちこちといっても、五大州でいえば、アジア州にかぎられている（中略）。とにかく、ずっとわたしは希望にみちていたとおもう。世界はひろいんだ。つぎからつぎへと、あたらしい土地の旅行を計画し、実行すればよい。未知の国はいくらでもある。一生かかっても、まわりきれないだろう。私の一生はゆきづまることがない（中略）。しかしわたしは、五大州のうち、いちばんおおきいについて、すでに自然的にも、文化的にも、主なタイプをみてしまったことに気がついたとき、正直のところ、まことにいやな気もちがした。これの五倍か。これの五倍で世界はおしまいか。」

これが、広大な地球のなかを遠く闊歩していた人間の精神世界だと考えると、実に興味深い記録に映る。梅棹自身、上述のような自身の外向きの精神が健全さを保っていたのは、その精神の外側に何らかの働きかける対象が無限に存在していたからだとも同論考で述べている。地球時代の到来を意識するとともに、地球の空間的な狭小さを意識するようになって、精神的な疲労を感じるようになった。それを「地球への倦怠」という言葉で表現しているのである。

*

こうした梅棹の指摘には同意するところが少なくない人も多いだろう。時代は違えども、申請者自身も、比較的広範囲に渡って地表面を旅してきた経験があることから、その指摘に対して賛同できる点はおおい。

「地球時代」や「地球への倦怠」を考える上で昨今の地表面では興味深い事例が起きている。新型ウィルスの感染症の大流行が地球規模でおこり、地表面ではいたるところで閉鎖的な空間が生まれた。我々は、実際に極めて狭小で、閉鎖的な空間において、人間がどのような心理状況になるかについて、身をもって体験させられたわけであるが、そうした狭小・閉鎖的な空間においても、人間は巨大で、無限に広がるような空間をどこかしこに追い求めていた。狭小で閉鎖的な空間で流行していたのは、仮想空間や、オープン・ワールド、第一人称視点での没入できるデジタルな空間であった。どんなに狭小で閉鎖的な空間からもアクセス可能で、無限に広がるような空間に多くの人々が身を置くことを選んだ。以下の記述は、そうした狭小で閉鎖的な空間から、オープン・ワールドや仮想空間に身を置いていた人々の声である（高木 2021a）。

「発端は去年の12月にまで遡る。友人から突然LINE電話にて連絡があり、最近では会えていないから一緒にゲームをしないかと誘われた。清楚で笑顔が可愛らしく、虫も殺せないような優しい心を持つ彼女から提案されたゲームは巷で噂の殺し合いのゲーム「APEX (Apex Legends)」だった。初めはかなり動揺したが、あまりに弾んだ電話越しの声に二つ返事で承した。」

このAPEXというゲームは、ファーストパーソン・シューティング (First-person shooter) という分野のゲームで、操作するキャラクター視点で仮想空間を移動し、武器や銃をもって敵を惨殺する人気ゲームである。同じような趣味を持つ海外のプレイヤーたちと仮想空間で、交流することができるゲームである。彼女は「誘われた当初の不安とは裏腹に、私はこのゲームにドハマりすることになる。（中略）私は戦闘で役に立たない自分の不甲斐なさに悔し涙を流し、YouTubeにてプロが挙げている切り抜きやクリップ集をみて勉強した」と語ってくれた。

最も開放的だと考えられてきた「地球」という空間に身おいていた梅棹が、「地球への倦怠」を感じていた。それから半世紀、感染症の大流行（パンデミック）によって、地球が歩き禁止の空間となり、そのなかで、さながら映画のように最も狭小で閉鎖的で空間に身おかざるを得なくなった人々が、「閉所からの解放」を実現しようと仮想空間やオープン・ワールドへの参入を試みていた点は特筆すべきにことに値するだろう（高木 2021b）。私たちはもうすでに「地球時代」から解放されているのではないだろうか。

3). 文明の尺度としての地球時代

「地球時代」とは文明の尺度である。その極めて一般的な私どもの時空間の認識について疑うことは骨の折れる作業を要する。ある旅人が経験するようなことは、歴史的にみれば、一時的なことである。それを相対化することによって、はじめて文明の尺度としての地球時代が私どもの眼前に現れてくれるように思える。以下は申請者が残した紀行の記録である。

「気品のある航空会社のカウンターにチェックイン。空港のトイレは近未来的で、有名デザイナーが設計したのかも思えるほど。鋭角に尖った形の便器。色は真っ白な雪のようで、壁にはキミドリ色の差し色。間接照明が便器を美しく照らし出す。あまりの美しさに写真を撮りたくなる。便器には自動で流れてくる水。黒いスーツを着た人々が入れ替わり立ち代わり入ってくる。手洗いももちろん自動。手をかざせばセンサーが自動で水を流してくれる。気品あるトイレの壁には小さな四角い箱が掛けてある。箱には4つの顔が書いてあって、エクセレント・グッド・ノーマ

ル・バッドのボタンを押して、トイレの感想を教えると言うのもの。「すごいトイレだった」と強制的に言わされている感覚を覚える。」

以上の記録は、本科学研究費をもちいて、北緯 40 - 45° 近海へと訪れた時に残したものである。こうした記録にあるようなトイレや間接照明、自動水洗、センサー、金属やエナメル加工、服飾品、デザイン、近未来的な空港を申請者が赴くような地球の片隅で見つけることは難しい。勿論、全く無いわけではないのである。世界史や文明史などといった歴史性を重視した梅棹の地球時代論への対論を考えるためには、極端な例や記録に残らないような歴史や、人類の記録をもちいた文明の相対化は、必要不可欠なのである。

私ども文明社会に属すると考えられている人間の尺度について考えたことがあるものはさほど多くない。だからどうしても異質に見えてしまうが、文明をそれほど確固たるものとして考えてしまうと、梅棹の地球時代論への反駁は難しいものとなってしまおうだろう。

既出であるが、ある人間集団 A が日常的に表現している稀少動物 (アオウミガメ) の回遊路や保護・産卵・漁獲場所の所在を示した地球儀がある一方で、人間集団 B が日常的に表現している稀少動物 (アオウミガメ) の回遊路や保護・産卵・漁獲場所の所在を示した簡素な円形にも似た認知地図がインディアンの科学として同時代的に併存していることは別稿にて示してあるが、そのような点を考慮しても、人間が用いる尺度や縮尺、空間的理性には、その人間集団がどのような社会や文化に属するかであったり、どのような空間哲学を持つかであったりによって、大きな違いを表出させる可能性があり、文明史や歴史性を重視している梅棹の地球時代論は多少、無批判的である。だから「地球時代」とは文明の所産であり、近代的な文明の時空間的理性を表現するための一つ尺度なのである。

4) 地球時代の継続性について

地球時代はどれほど継続して続いていくのだろうかと言う点について、梅棹も一連の「地球時代論」の中で言及することはほとんどなかったように思える。様々な歴史時代がそうであったように梅棹が指摘する地球時代にもいつか終わりが来るに違いないが、それはいつなのか。

地球はオープンスペースで溢れている。おそらくそのような思想や空間的理性の発見によって、「地球時代」にも終わりが来るのではないかと思っている。昨今の狭小で閉鎖的な空間に問題意識の向上を鑑みても、それは意外にもそう遠くない未来なのかもしれないとすら思う。

人間の有する時空間的理性 (地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc) を理解するための有力な一手として提出された梅棹の地球時代論であり、成長の限界や資源の有限性が問題視される地表面の現況 (人間や自然の置かれた状況) を表現する方法として、極めて示唆に富む考え方であるようにおもえるが、上述したようにその論調は極めて歴史的であって、文明論的である点は再度指摘しておかなければならない。本科学研究費の成果として提出される申請者の「地球時代論」は、文明史的な梅棹の地球時代論の批判として存在する。近代的で文明的な地球とは、全く異なるような意味不明で反転したようにみえる地球の存在論が本科学研究費成果の特徴である。これがなければ梅棹の主張する「地球時代」という歴史的で、文明論的な時空間的理性は存在しえない。

本科学研究費と類似するような相対主義的な視点を有している民族学や人類学の成果はすでに報告されており、本科学研究費もこうした点で、生態史観に依拠する梅棹の「地球時代論」とは相違するだろう。人間の有する時空間的理性 (地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc) を理解するうえで、梅棹の提出した「地球時代論」は現生地球を史的発展性の途上に置き、近代史・文明史との連続性を強調させている点で反駁の余地があり、本科学研究費はその対論として、相対主義的な民族学や人類学の成果をもとにした「地球時代論」を構想している。そのことを再度指摘して、本稿を締めさせていただきます。

以上、本科学研究費の研究を基礎にして、諸人間集団や人類 (又は単純に人間) の有する時空間的理性 (地球環境・人為空間・Commons・パブリックスペース・グローバル化現象, etc) の理解に対して、強い影響力を持ってきた梅棹忠夫の一思想である「地球時代」について、本科学研究費をもちいて、申請者なりの反駁・対論草稿・論証を練り上げることができたことを示した。本科学研究費の成果は、「地球時代」という議題に強い影響力を持ってきた梅棹の一連の「地球時代論」に対する申請者なりの反対論証の基礎を構成してくれるような重要な位置づけとなっている。

【文献】

梅棹忠夫 (1991) 「地球時代の文明論」『梅棹忠夫著作集 (第 13 巻) 地球時代に生きる』中央公論社. pp225-313.

高木仁 (2020) 「カリブ海のウミガメと先住民 -旧英国保護領の巨大消費地の現在」『BIOSTORY』33. pp44-49.

高木仁 (2021a) 『疫病流行下における幾つかの生活記録簿』『生き物文化誌学会発表要旨集』. pp11

高木仁 (2021b) 「頭のなかのパンデミック」『月刊みんぱく』. pp18-19.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高木仁	4. 巻 -
2. 論文標題 ミスキート	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ文化事典	6. 最初と最後の頁 142-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池谷和信・高木仁	4. 巻 33
2. 論文標題 ウミガメの文化誌－日本から世界へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビオストーリー	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木仁	4. 巻 33
2. 論文標題 カリブ海のウミガメと先住民－旧英国保護領の巨大消費地の現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビオストーリー	6. 最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池谷和信・高木仁	4. 巻 33
2. 論文標題 ウミガメと人の共存へ向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビオストーリー	6. 最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高木仁
2. 発表標題 鋼鉄の船と木のカヌー
3. 学会等名 文化人類学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高木仁
2. 発表標題 東ニカラグア・低湿地インディアンのモビリティーに関わる物質文化
3. 学会等名 国立民族学博物館・共同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池谷和信・高木仁
2. 発表標題 ウミガメ例会－趣旨説明
3. 学会等名 生き物文化誌学会・ウミガメ例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木仁
2. 発表標題 ウミガメを食べる：カリブ海
3. 学会等名 生き物文化誌学会・ウミガメ例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------